

近代中国知識人の東西文化観

——蔡元培思想形成過程の考察をめぐって——

*Eastern and western Culture conception of modern Chinese intellectuals
—— the evolvement of Cai Yuan-pei's thought ——*

蔡 建國*

アヘン戦争から今日までの一世紀半にわたって、中国の伝統文化と西洋文化の問題認識に激しい摩擦が存在してきた。この相矛盾する考え方は中国が近代化過程の中で伝統文化の上に西洋文化をどのように消化吸収すればよいかという認識問題からなりたっている。

この葛藤の中で、近代中国知識人は自らの伝統文化観と近代化の関係をどう整合的にとらえるか、苦闘してきた。本論は蔡元培が東西文化思想を融合することに対する考察を通じて、近代中国知識人の思想文化の発展と変革の過程における役割を指摘し、知識人がいかに伝統文化の精髓を維持しつつ西洋文化の精華を学んだかを明らかにする。さらに、彼らが中国文化の近代化を実現するためにどう考えたかを指摘しながら、中国が改革開放の中で西洋文化を学び、吸収する現在、そのあるべき精神と方法を明らかにしたい。

—

十九世紀半ば、数千年にわたる悠久の歴史をもつ中国伝統文化は、列強の軍事侵略にともなった文化衝撃という挑戦を受けた。東西文化の激しい摩擦と衝突の中で、中国人は先進的な西洋文化との接触を始めざるを得なかった。その結果、一部の中国人は中国伝統文化と価値観に対する自信を揺がせ、あるいは失い、思想界ではついに全面欧化論と全面国粹論との間で激しい論争が引き起こされた。ゆえに、西洋列強の侵入は、中国社会に深刻な政治的、文化的そして社会的危機をもたらした。このような深刻な危機をまのあたりにして、一部の知識人は悠久の中華文明と急激にもたらされた西洋文明との間の差を感じ、社会的危機の解決方法を摸索し始めた。彼らは西洋に学ぶという重大な課題を提示し、社会改革の推進を図った。

*Cai, Jian Guo [情報文化学科]

蔡元培はまさにそれら知識人の一人である。

強烈な時代意識を持った蔡元培は、同時代のほかの先進的な思想家と同様に、危機を正視し、この危機の深刻さに対する認識を深めた。それゆえ、単純かつ個別的な問題としてではなく、本質的全体的そして内在的問題としてこの問題を考えて、解決方法を探そうとした。彼は、中国の衰弱と惨敗の原因は旧学の弊害にあると認識した。社会の厳しい現実はその社会への批判精神をはぐくんだ。彼は伝統文化の束縛から脱出し、新学の中から救国の新しい知識を探り、西洋文化のその本質からはじめて、精髓を学び、「救亡図存」を実践したのであった。それは、中国伝統文化が外来文化から衝撃を受けたとき、先進的な知識人は新事物に対して鋭い意識と挑戦的精神をもつことを示した。蔡元培の同時代人のみならず後世の学者が一致して彼を「学貫中西」、「学界泰斗」と称する原因は、彼が「中国固有文化の精華を凝結し、西洋文化の優美を採集して、哲学、美学、科学を一つに融合し、ただ前人の事業を受け継ぐだけでなく、将来の発展に通路を開いた」⁽¹⁾こと、さらには「固有文化遺産を受けつぐ一方、十九世紀の民主主義、自由主義など新思想を吸収し、大いに高揚し、それによって中国の近代思想界の先導者となった」⁽²⁾ということにある。これらの評価は蔡元培思想の本質と特徴を表わしている。

「西洋の衝撃」を受けたことは蔡元培が思想形成する上で重要な要因となっている。彼は東西文化が激しく衝突するという時代潮流の中で厳しい試練に耐えた。中国伝統文化に深い素養をもつ蔡元培であったが、科学の最高峰である進士になった時に、深刻な亡国の危機——日清戦争における中国惨敗——が彼に衝撃を与えた。こうした複雑な社会背景と民族存亡の状況をまのあたりにして、彼は民族の危機と国家の未来を考えた。

蔡元培は洋務運動時期の1868年に生まれ、抗日戦争期の1940年に逝去し、民国政府の初代教育総長、北京大学長と中央研究院長を歴任した。彼は日本文化を学習することから始め、5年間近くに及んだドイツでの留学等、一生の中で留学や視察などを合わせて六回出国し、延べ十二年間外国で過ごした。それゆえ、西洋文化に精通し、東西文化の融合を主張し、そして文化の近代化を実現させることに対し、全力を尽くした。彼は清仏戦争、日清戦争、八ヶ国聯合軍の侵略、抗日戦争など列強の中国侵略戦争を経験した。また、清王朝、袁世凱、北洋軍閥及び国民党などの統治時代をすごした。そして戊戌変法、辛亥革命、五四運動など政治の急激な変革と政治危機の時代を経た。一方、思想の分野では、封建主義と資本主義という二つの違った社会制度や歴史伝統と文化観念の激しい衝突に直面した。このような歴史的背

景の中で、知識人として一貫した思想を保持することは簡単なことではなかった。

蔡元培と近代中国との関係を研究するためには、彼の近代化思想の形成と発展の背景、即ち時代が思想に与えた影響を検討しなければならない。十九世紀後半から、彼の思想は発展し、その後、彼はいつも中国思想界の舞台中心で活躍した。蔡元培は中国近代化事業にたゆまない努力をし、後世に貴重な思想と経験をもたらした。先人の思想と経験は、近代中国思想の遺産として中華文化の宝庫のなかで輝いている。したがって、この思想と経験に対する研究を行い、歴史的発展の本質と連続性を明らかにすることは、歴史学者にとって重大な課題である。

二

周知のように、蔡元培の精神は彼の「兼容並包」思想から生じたものである。

蔡元培の「兼容並包」思想には深い意義が含まれている。蔡元培が学習し、包容したかったのは新文化と新思想である。封建時代の根強い旧文化と思想において「包」と「容」の必要はない。民族が深刻な状態におかれて、蔡元培は、伝統文化は「救亡図存」の重任を引き受けられないと明確に認識した。そこで、彼は伝統文化の束縛から脱却すべきであると決心し、自覚的に西洋新文化と新学説を学び、そして中国は新文化と新思想を許容するべきだと指摘した。

日清戦争後、中国社会は西洋列強の侵略による厳しい危機に直面していた。危機に瀕している国勢と腐敗した清政府に対し、ブルジョア的改良思想を持つ知識人は、西洋文化を学び、新学を提唱した。したがって、ブルジョア的改良思想と西洋のブルジョアジーの「新学」が中国で広く流布した。その新思潮の隆盛を究めようとしていた一方で、中国伝統文化にも通曉していた蔡元培は、科学の道で注目すべき業績を獲得し、高官の列に入るのは当然のことと考えられていた。しかし、封建的經典の教義は、官職や利益に淡泊で、それよりも進歩を追求するこの青年を束縛することはできなかった。彼は新学に注目し始めた。日本が中国人に押しつけた嚴重な危機は、この朝廷に勤めていた青年翰林の心を揺るがした。この大きな衝撃によって、蔡元培は自分の使命を認識した。それから旧觀念から脱却し始め、伝統的經書よりもむしろ西洋新学に注意を向け、自分の視野を日本を含む外来文化へと移し、西洋新学説を受容するようになった。ゆえに、日清戦争敗戦後の社会的現実、蔡元培が西洋に注目し、新知識を学ぶようになった直接的な原因であったといえる。

彼はその時期に西洋や日本の歴史と現状、政治理論及び自然科学などの分野を紹介する書籍を大量かつ熱心に読んだ。

もしも蔡元培が日清戦争後間もないうちにさまざまな書籍を広汎に読み、新知識を理解し、社会政治の危機という刺激を受けつつ、変化する時代潮流の影響をうけて思想を日に日に新しくしたとすれば、本世紀初めにおいて、彼が深く外国文化を学びつつ研究し、自らの思想をますます成熟させた過程こそ、当時の中国の新型知識人が西洋文化の挑戦に対して持っていた精神と態度を典型的に代表したものであった。そして、彼はこの精神と態度から、東西文化を融合させる意義を示した。

周知のように、一世紀あまり前、西洋文化が東方へ浸透し始めた頃から、東アジア諸国の知識人はこの急に入ってきた異文化に対し、一連の深刻な問題を考えた。それは西洋文化を受け取るか、それに抵抗するか、また、東アジアの各民族の文化をどのように互いに接触させるかなどの問題であった。多くの学者は西洋文化が中国と日本という二つの東アジア国家において異なる受容のされ方をしたことが、日本の「成功」と清末中国の「失敗」をもたらしたのだ、と認知したのである。

積極的に西洋を学ぶ近代日本とは対照的に、清末中国は、盲目的に自画自賛することによって孤立してしまった。西洋学は学者に注目されないだけでなく、排斥された。しかも近隣日本の発展原因を知る人すら極めて少なかった。梁啓超は以下のように鋭く指摘した。アヘン戦争以後、「朝野には西洋のことに言及している人がいるが、しかし称賛されているのはただその船が丈夫なこと、大砲が利くこと、製造方法が精細なことだけである、採用したもの、大砲、機械、軍兵だけである；学問が必要なことが分からないし、また、政治が必要なことを知っている人もいなかった」^[3]と。ここに示されたのは、中国知識人の多くが西洋文化がおしよせてきている現状を認知しつつも、尚未だ、中国固有の考え方で西洋文化の衝撃に対応しようとしたということであった。しかし、西洋列強による絶え間ない軍事攻撃と不平等条約の前に、この「天朝上国」の傲慢な心情や自閉保守的な夢は徹底的に破壊された。伝統的な儒教文化は強烈で無情な衝撃を受けた。亡國の危機にかられて、この激動する時代に生きる少数の先進的な知識人は覚醒し始め、そしてまったく新しい態度で世界を注目しはじめた。当時、知識界の状況は、蔡元培が後に指摘したように、「中国が日本に敗れてはじめて一部の学者は、中国の政治学説は実に西洋各国に及ばず、日本の明治維新にも及ばないところがあることを感じはじめた。そしてキリスト教会や日本人が翻訳した洋書を読む人がしだいに

はじめた……」⁽⁴⁾、このように、朝野の人々は日本に注目し始めた。立憲改革派、革命派をと問わずに続々と日本に渡り、日本に学び、あるいは日本を通じて西洋に学ぶ風潮がおこった。彼らは日本が強国となった経験に学んで中国社会改造に有用な思想方法を吸収することを望んだ。蔡元培はこのような流れの中でも代表的な人物であった。

蔡元培は時代の流れに応じて、西洋と日本に注目した。彼は日本文化に接触し、研究することで外国文化を学び始めた。この日本に学ぶことは西洋に学ぶことへの手段と近道とする考え方は、蔡元培の強烈な時代感覚を表わしていると同時に、清末の中国知識人の西洋に学ぶという趨勢や日中近代文化交流の歴史的な道標となっている。当時、彼は他の思想家と同様に、日清戦争で中国が隣の小さい島国に敗れたことに恥辱を感じていた。同時に、これによって中国が覚醒喚起されることを切望した。思想界のこのような覚醒は、中国に改革の機会をもたらした。敗戦の悲劇は、知識人に反省の機会を与えた。蔡元培が外国文化を学習しはじめたことこそ、彼が日清戦争で中国が日本に負けたこの重い衝撃を受けとめた結果であった。蔡元培は歴史に対する反省の中から、中国は西洋に学ぶべきだと痛感し、西洋の挑戦に対して、中華民族の恢復と振興を図るべきだと強く意識した。

周知のように、蔡元培は日本の侵略政策や行為を激しく批判したが、その一方で、日本の明治維新以後の急速な発展の原因をも重視した。彼は日本に留学したことがないにもかかわらず、日本の教育制度と文化に十分な注意を払った。従って、もし彼が日本の軍国主義的な政治姿勢を批判する一面だけをとりあげ、彼が日本の教育と哲学に対して研究し、そして、そこから深い影響を受けたことを無視するならば、蔡元培の思想に対する理解は明らかに不十分である。

蔡元培が日本について学び始めたのは十九世紀の最後の数年間である。

彼は光緒二十四年に友人とともに北京で東文学社⁽⁵⁾を創設し、「和文書を学習」⁽⁶⁾しはじめた。この時期、彼は日本語の学習に興味津々で、日本語の勉強がまだ十日足らずにして日本語書籍を翻訳し、「楽しく感じた」⁽⁷⁾といった。ここからも、蔡元培が新しい知識に対して学習しなければならないという切迫した気持ちが感じられる。当時、彼の親友の張元済らは英文学校を開設していたが、蔡元培は日本語の勉強は英語よりしやすいし、それに日本はすでに西洋の多くの書物を翻訳しているので、日本を通して西洋を勉強するのが近道であると考えた。彼は自分で日本語を勉強するだけでなく、官を辞職して故郷の紹興中西学堂で仕事をしていた頃にも、学校内で日本語の勉強を普及させ、日本人教師を招いて「日本語科目を増設」⁽⁸⁾

した。

もしも蔡元培が中西学堂で学生の日本語の勉強を重視することで新しい風潮を開いたとするならば、彼が南洋公学で実施した日本語の教育方針の目的はより明確なものといえる。彼は祖国を救うという目的のため日本語をよく勉強し、そこから外国の先進知識を勉強するようと学生を励ました。彼はそこで日本語の勉強を提唱するだけではなく、自ら日本語の教師をつとめた。ここで指摘すべきは、新式学校で日本語を勉強する意義を強調し、日本語教育を積極的に導入し、中国が強国に成るために必要な新しい人材を育成したことである。中国の日本留学ブームが出現する前のこの出来事は、言うまでもなく彼が強烈な時代意識をもっていたからであって、のちの日中文化交流の発展に大きな影響をもたらした。

蔡元培は学生の日本語学習を重視すると同時に、自分も日本語の勉強を続けた。それと同時に、1899年から1901年までの三年間に、彼は頻繁に日本人と交際し、直接文化交流を行った。このことも蔡元培がこの時期に日本文化に対して強い興味を持っていたことを示している。

蔡元培の思想に重要な影響をもたらしたのは、19世紀末から20世紀初期までの数年間の日本語著作の勉強であると思う。この時期に、彼は『日清戦争史』や『進化新論』など日本文化、思想と制度を紹介する大量の書籍を読んだ。中国伝統文化に造詣が深い蔡元培は日本に留学したことがなかったにもかかわらず、多くの日本語の哲学書を読み、翻訳し、深い影響を受けた。彼は西洋哲学の理論をもって東洋哲学を研究し、中国伝統哲学思想を発展させ、中国哲学研究の分野に貢献した。したがって、彼は当時数少ない近代的方法を用いて哲学を研究した中国の先駆的な学者の一人となった。それと同時に自らの東西文化を融合させる思想的基盤をも作り上げた。

周知のように、蔡元培の近代化思想および彼の近代中国に対する貢献のうちで最も重要な部分は、教育近代化思想とこの思想に基づく教育改革の実践である。彼の教育思想は彼の文化思想や中国近代化思想の中でも重要な位置を占め、近代中国の発展に対して歴史的な、かつ現実的な意義をもつ。ゆえに、彼の教育思想の形成と発展過程を分析するためには、前世紀最後の数年間彼の思想が変化した背景に注目しなければならない。そこから彼の外国文化に対する態度、立場およびその取捨の基準を知ることができ、さらには彼の東西文化を融合させるという思想の根源をも把握することができる。

近代日本発展の歴史は、数多くの知識人が西洋文明を輸入することを提唱し、そしてそれ

が日本に有利に働いたことを世界に示した。明治維新以後の一時期は日本の啓蒙時代と称されている。日本の教育と学術研究の重点は西洋学習におかれ、実践の中から人々は西洋の学術に基づいて日本の近代化を図ることが明らかに有利であることを感じた。西洋の技術で日本人の生活の質を高めることだけではなく、日本の知識人はまた西洋の社会制度と思想方法に対する研究にも力を入れていた。日本の経験は、中国知識人の多くに啓示を与えた。彼らは日本文化の学習を切望し、あるいは日本を学習することによって西洋文明を把握する架け橋としようと主張した。これらの知識人の中で、蔡元培は成果をあげた一人である。前述のように、学界で注目されている蔡元培の哲学的基礎すなわち、彼が哲学研究の分野に収めた成果および彼の学術思想の重要な構成部分としての哲学思想は、まさにこの時期、彼が日本哲学者の著作を研究したことに基づいていたのである。当時数多くの日本留学者がいたが必ずしもこのような成果をあげてはいない。彼は日本語の著作からいかに西洋の学術の方法を利用して東洋の学術を研究するかということを考えた。その上で、彼の伝統文化という基盤を加えると、彼は一般の西洋への留学生ともまた違ってくる。日本語書籍を読み、それらを翻訳することによって新しい知識を得ることは、清末の蔡元培にとって重要な道であった。日本文化が蔡元培の思想の形成と発展に与えた影響は明確である。しかし、これは蔡元培が日本に学んだことの全てではない。

蔡元培の早期教育活動の中で、日本の教育思想と制度に対する学習も重要な内容である。彼は日本の教育方法を導入する事に着目したのみならず、日本の教育制度と科目の設置にも関心を持った。ゆえに、清末彼が教育に献身して以来、近代中国教育制度と思想に対する全面的な改革を行うまでの過程で、日本の教育思想と制度から啓示を受けたことは疑いない。そして、彼が教育思想を形成し、発展させていく過程の中で、彼は日本の教育体系を参考にし、近代日本教育制度の中から中国に適合する合理的な部分を吸収したさまざまな要素を見つけることは難しくない。彼はかつてつぎのように指摘した。「今に至るまで、われわれの教育規程には、日本の方法を取り入れたものが多かった。これはわれわれが日本に妥協していることを示すわけではない。われわれは日本の教育制度がヨーロッパ各国のそれを取り入れたものであることを知っている。しかし、ヨーロッパ各国の教育制度はみな過去から変化して来たものであって、それぞれまったく整然としているわけではない。しかも西洋人の独特な習慣をも含んでいる。

日本の制度は維新のときにつくられ、西洋各国の制度を取り入れて日本のそれと折衷した

ものであるため、日本の方法を吸収することは最も適切である」⁹⁾。この指摘は、蔡元培が日本の教育方法を学習し吸収する理由を明確に示している。そして外国文化を学ぶときに本国の国情から出発して国情に合致する合理的な内容を選択し、決して盲目的に鵜呑みにすることをしないという彼の基本的な態度を反映している。彼にとって外国の文化を移植するためには選択を行わなければならなかった。これもまた彼の東西文化観の中の重要な本質であるといえる。このように選択をして外国文化を受容するという態度があったからこそ、彼は近代中国文化を再建する面において他の人間を超える貢献ができるようになったのである。

しかし、蔡元培は外国文化に向ける視野をアジアに止めなかった。日本文化との接触を通じて、彼は外国文化を勉強するには結局東洋文化と異なる西洋文化を勉強しなければならない、文明開化の時代には西洋に学ぶべきだが、近代化が発展している時期においてさらに西洋を理解しなければならない、と考えたのである。

19世紀末期から20世紀まで、人類の自然、社会及び人類自身に対する認識が飛躍的に発展した。ヨーロッパは科学技術革命において目ざましい成果を挙げた。科学技術の発展は、ヨーロッパ社会生活のさまざまな方面に大きな衝撃をもたらし、人々の思考方法を大いに変化させた。西洋社会変化は魅力的で、東洋の人々を引き寄せた。先述したように、日本は積極的に西洋に学び、明治維新を行った。しかし、その時の中国は伝統文化が西洋文化からの強い挑戦を受け、伝統文化の緩やかな変革が引き起こされた。文化的な変革は社会変革の産物であると同時に、社会の全面的変革の先導的な役割を担う要因でもある。ゆえに、中華民族の危機が日に日に増していく中国において、一部の先進的な知識人は生き残るためには西洋に学ばなければならないと明確に意識した。蔡元培はこのような風潮の中で、ヨーロッパへ西洋文化の本質を勉強しに行くことを決意したのである。その時、彼はすでに日本の書物を通じて西洋文化を勉強することに満足することができなくなっていた。

もし、日清戦争後蔡元培は国内で外国文化を学び、自分の知識と考え方を変化させ、士大夫から新型の知識人に転換したとするならば、外国に出かけ、ヨーロッパに留学することで、彼は具体的より深くヨーロッパ、ブルジョアジーの先進文化に接触し、さらにそこから新しい知識構造と精神栄養を吸収し、文化思想を形成することができるようになった。

蔡元培はドイツ在住時に、文化比較の研究を通じて、次第に東西文化を融合するという観念まで思想を発展させた。彼は、東西文化をうまく融合させるのは当然だが、中国人は西洋文化を勉強すると同時に、中国伝統文化を忘れてはいけないと考えた。ゆえに、彼は1907年

からの四年間のドイツ留学中に西洋文化を勉強すると同時に、中国文化の研究と紹介にも力を入れた。たとえば、彼が翻訳した『倫理学原理』、編纂した『中国倫理学史』や『中学校修身教科書』などは、彼の東西文化を融合させるという理論を实践したものである。蔡元培が『中国倫理学史』を編纂したのは、19世紀末期ヨーロッパ倫理学が次第に中国に紹介され、西洋の倫理観と中国伝統の倫理観との間に激しい衝突が起こった時代のことであった。彼にとって、もし西洋の倫理学を中国の伝統的な思想体系と比較せず、そのよいところを選んで従わなければ、必ず道に迷ってしまうと考えた。中国伝統文化は倫理道德の教育を重視したにも関わらず、学術的な意味での倫理学が確立されていないし、専門的な倫理学史を研究するものも皆無であった。蔡元培は西洋学術史の規則と日本人学者の東洋倫理学史の研究に基づいて、系統的に中国の伝統的倫理学を整理して学説を完成したのである。ゆえに、この本は西洋新思想の新方法を用いて中国の伝統的倫理学を研究した最初の著作であると学術界で認められている。

『中学校修身教科書』は蔡元培が自らの倫理道德観を社会に宣伝、紹介したものである。この本の「例言」で、彼は「本書は我が国古代聖人の道德の原理に基づき、東西倫理学著名な学者の観点を吸収して、精細に取捨選択して、今日の社会に適合させようとするものである」¹⁰⁹と強調した。1912年5月、商務印書館はこの本を出版するとき「中外を一つに融合した」¹¹¹と評価した。1915年1月に出版された『哲学大綱』で、彼は「何冊かのドイツ哲学者の本を手本にして」¹⁰²この本を編纂したのでであると説明した。さらにこの本は、「ドイツ哲学者の学説を多く取り入れたが、ただ宗教思想に関する一説は、『本当の宗教は信仰心にすぎない。信仰の対象は、哲学が進化するにしたがって変化し、また各個人の哲学観のレベルの違いによって異なっている。これがいわゆる信仰の自由である。およそ現在儀式がある信条をもつ宗教は将来的には淘汰されるはずだ』という説は私自ら創ったものである」¹⁰³。「また美学については特別な注意を払ったが、同様にドイツ学派の影響を受けた」¹⁰⁴と彼は述べた。

今述べたことをまとめて見れば、以下のことが明らかになる。蔡元培は西洋文化を学ぶ目的が明確で、さらには西洋文化を勉強すると同時に、中国伝統倫理思想の研究に対しても注意を払いつつ双方の比較研究をしている。彼のこのような思想は、彼の西洋学術思想に対する理解の深まりにつれて発展した。彼は自覚的に東西を融合させ、「よいものを選んで」ということを主張した。中国に適用できる部分を受け取り、古いものを固守することに反対しながらも全面的に西洋化にすることにも反対し、新しいものを創ることに力を注いだ。このよ

うな東西文化に対する一貫的な精神と態度があったからこそ、彼は東西に学術研究を精通することができるようになったのである。

彼は大学で西洋文化を広く学ぶだけでなく、あらゆる機会を利用していろいろなところへ旅行に出かけ、身をもって異文化を体験した。現地を見ることによって美学を感じ、美学の知識を獲得する。これは蔡元培がドイツに留学したときの最も重要な収穫であった。

彼はドイツに四年間留学し、その後も何度かドイツへ訪問し教育を視察した。彼の一生の中で外国に在留したのは延べ12年間であって、その中でドイツにいたのは5年間だった。ドイツは彼がもっとも長く在住した外国の国である。ゆえに、彼はドイツ文化と深い関係を結んだ。ドイツ文化は蔡元培思想に対してかなり深い影響を与えた。研究者らは蔡元培思想を形成させた要素を分析する場合に、彼と日本文化との関係を注意してこなかった。しかし、ドイツ文化の蔡元培思想の形成と発展に対する役割は大いに注目されている。蔡元培はドイツを考察することによって、ドイツの教育状況と制度の特徴とその長所を把握した。彼にとって、ドイツ教育精神の重要な核心は、学生の独立自主能力の育成および学生の個性を伸ばすという点である。これはまさに民主主義社会に欠かせない基本的な精神であり、近代教育の根本的な出発点でもある。中国教育の遅れた状況を変え、近代教育を発展させるために、封建教育の青年に対する束縛を根本的にとりのぞかなければならない。ゆえに、教育に民主的な精神を与えることは中国の教育者にとって一刻も緩めてはいけない任務であると考えた。蔡元培はこの任務の必要性を十分に認識している。本世紀二、三十年代において、彼はさまざまな角度からドイツの教育制度を紹介し実行したが、これはまさにこのような動機から出た行動である。

蔡元培が興味をもち、共感したのは、「学問研究に専念する」¹⁶⁾「精細で分析的な研究を重視する」¹⁶⁾というドイツの大学の特徴と方法である。彼はドイツの中学校以上の学校、とくに大学の発展状況と講義科目、研究所と学位制度に特別な関心をもった。彼はかつて演説や文章の中でいくたびもドイツの高等教育の体系を紹介した。蔡元培はいう。「ヨーロッパ各国の高等教育制度のなかでドイツの制度は最もよいものである」¹⁷⁾と。彼がこのようにドイツ教育の先進性を強調した目的は、中国の人々の注意を呼び起こすことにあった。

彼はドイツ大学の民主管理精神を高く評価している。さらに彼はドイツの大学長の選挙方法までを導入した。彼は民主的かつ科学的な大学管理方法は中国の大学にも必要なものであると痛感した。なぜならば、これは建学精神と関わっているからである。ゆえに、彼はドイ

ツの大学の評議会制度に極めて高い評価をしている。彼は北京大学長と中央研究院長を勤めているときに、このような管理方法を用いてこの二つの最高の文化と科学研究機構に活気と活力を与え、中国近代化の過程において大きな役割を果たした。

蔡元培はドイツ留学時、ドイツの科学の勉強にも注意を払った。ドイツでの経験によって、彼は、科学による国家の振興は中国近代化に欠かせない条件であるとはっきり認識した。ゆえに、彼は帰国後ドイツの科学成果の宣伝と称揚に力を入れ、中国人の科学に対する認識を高めさせた。

蔡元培のドイツ留学中の最も重要な収穫は美学である。彼は中国で一貫して美学と美育を提唱したが、それはドイツでの勉強と関わりがある。五・四新文化運動の時期に、彼は北京大学を中心として、自ら美学を宣伝し、西洋文明を流布させた。1921年の秋、彼は北京大学で「美学」の科目を担当した。講義で専門的にカント、Wundtなど学者の学術思想を紹介したことは、何よりの証拠である。

蔡元培はただ中国においてドイツの文化と教育制度を宣伝し、中国人の西洋文化に対する認識を啓発しただけではなく、積極的に中国とドイツとの間の文化交流を行い、両国の民衆が互いの異文化を理解できるように尽力した。蔡元培は半世紀前にすでに国際間の文化と学術交流を強調し、実行したのである。したがって、異なる民族間の理解が深まり、東西文化の融合が促された。このような意識とそれと一致した行動は蔡元培が世界事物の発展法則に対してもった鋭い先見性を示している。

以上、蔡元培が努めて外国文化を勉強し、それによって思想上生まれた大きな影響の原因、さらには彼の中国とドイツ文化交流に対する態度などを検討した。そして蔡元培が西洋文化を学習した目的は中国文化を高揚し発展させることであることを明らかにした。このような基本的精神から、ドイツにいる数年間に、彼は主に西洋文化発展の過程を学習し、考察した。彼は西洋文化発展の過程と法則から西洋文化の近代化の本質的な問題を把握した。これは中国文化近代化に欠かせない知識と学問であった。蔡元培がドイツで西洋哲学を丹念に学習し研究したのは、哲学的観念こそが人々が世界を認識・観察そして改造する方法論であると、彼が認識したためである。ゆえに、中国の伝統哲学思想に深い造詣をもつ彼は、西洋哲学の学習を通じて、東西哲学思想の比較研究を行い、東西の価値観と倫理観を異なる観点から見ることによって世界全体を考察し、中国を分析した。その目的は、事物に対する見方の客観性を高めることにあった。彼の思想発展とその後の実践から見れば、彼のドイツ留学の目的はす

でに達成され、そしてそれをも大いに超えたのである。

しかし、われわれが注意すべきは、蔡元培の西洋文化に対する精神は、その懐が広かったのと同様に、決してその興味をある一つ國家の文化に限定することがなかったことである。彼は世界文化を広く勉強し包容するという強い意識があった。ゆえに、彼はヨーロッパ文化を勉強するときに、ドイツを西洋文化学習の根拠地としたにもかかわらず、彼は西洋文化へのまなざしをドイツ民族以外のヨーロッパ民族文化へと広げた。彼は最初のドイツ留学中、大学の授業を聴講する以外、夏休みを利用してよく他の国へ旅行しに行ったが、そこでヨーロッパのほかの民族文化への認識をふくらませたという事例はこのことを示している。同様に、彼は悠久の歴史をもつフランス文化にも深い興味をもった。彼にとってフランスは文化と科学が発達しているばかりでなく、政治においてもブルジョア大革命が行われた国であった。フランスでは教育分野においても封建思想が消滅し、専制の弊害が取り除かれ、ブルジョア民主主義思想が広汎に実現されていた。この認識にたつて、彼は1913年9月5日に家族を連れフランスに留学した。まずフランス語を習い、そして本を著した。フランスにいる間の彼の最も重要な成果は、中国青年がフランスで労働しながら勉学に励む「勤工儉学運動」を組織したことである。彼は個人的経験から、中国の未來の使命を担う中国青年は西洋文化を学習する必要があると痛感した。ゆえに、彼は中国とフランスの政界の友人と手を結んで華僑教育会を設立し、中国留学史上はじめてフランスにおける「勤工儉学運動」を導いた。この運動は中国近代留学史、近代中国政治史、革命史そして文化史などの分野に対しても重要な影響を与えた。この運動の意義はすでに多くの学者によって論証されているので、ここでは省略することにする。

三

アヘン戦争以降、近代中国は西洋文化との接触と摩擦によって、「ヨーロッパ文明を吸収する機会」⁽¹⁸⁾を持つようになった。蔡元培は文化発展の角度から、中国はこのチャンスを利用して自身の努力を経、西洋文化の長所をもって中華文化の短所を補い、よって一種の世界歴史潮流の発展に順応し、そして中国社会進歩を促進する新文化を創造すべきであると、鋭く認識した。また彼は「中国とヨーロッパはただ、表面的相違があるものの、文明の根本においては大差がなく、もし注意するとすれば両文化進歩の過程も互いに参考とした点を見出すこ

とも可能である』¹⁹⁾と指摘した。ゆえに、彼は何回となくはるばるヨーロッパに足を運び西洋文化の精髓を学び、考察し、西洋文化の精華を把握する為に力を注いだ。

ここで強調すべきことは蔡元培が外国に留学したのは40才から60才までの20年間だったことである。その頃の彼は、すでに中年に達し、しかも豊富な社会経験をもっていたため、広範に亘る西洋学問を選択して吸収し、決して盲従することはなかった。西洋の環境下に在っても、西洋に陶醉せず、又、同化せず、終始理性的且つ冷静に中国及び西洋文化に対する分析と研究を行った。彼は全面的に西洋文化を勉強し、西洋文化の真髄を追求すると同時に、西洋学問の中の哲学や美学、そして民主と科学精神など学術思想を主な内容として特に力を入れ考察し、研究した。哲学思想は世界観と方法論であり、美学は人の精神と素質を高め得る。また民主と科学は近代中国思想と文化領域における最も不可欠な精神であると彼は認識した。彼が勉強した内容から見ても分かるように、即ち一貫して学理から着手して、学問を研究するという学術研究の根本的な方法を堅持している。帰国後、彼は西洋文化の伝播を自分の責任とし、ヨーロッパの文化と科学成果を紹介しながら、その科学理論を論述した。広くて深い近代世界科学の知識を持つ彼のこれらの紹介や論述には広さと深さが存在する。彼は「我が国新文化の基礎を樹立し、世界学術界に参加する」、そして「我が国文明前途の百年計画を定める」²⁰⁾ということを一生涯の目標として、中国文化の発展と繁栄に全力を尽くし、その影響は文化と思想の分野に限らず社会全体に及んだ。

西洋文化の科学精神を勉強し、また科学的な精神をもって西洋文化に対応するということは、蔡元培が西洋文化を学習する時に一貫して強調した態度である。

蔡元培の東西文化観の中において最も重要な基本思想は、文化に対して具体的な研究を要し、「善を選んでそれに従い」、古きものに固執し、盲従することに反対するという主張である。1921年6月、彼は渡米した折、教育に関する視察をし、ジョージ・ワシントン大学で講演を行った。そこで彼は以下のように指摘している、「歴史を見てみよう、凡そ異なる文化が互いに接触すれば、必ず更に新しい文化が生まれる」²¹⁾。この観点は蔡元培の東西文化を融合するという一貫した思想を反映している。彼にとって、学術研究の目的は「近代科学の方法を以て、中国固有の学術を整理し、それを現代に適用させる」²²⁾ということである。彼は絶えず文章や講演で自分の観点を論述している。彼はかつて以下のように語った、「子曰く：『我れ三人行れば必ず我が師を得。其の善き者を選びてこれに従う。其の善からざる者にしてこれを改む』。これはまさに旧習を守らず、盲従しない態度である。現在最も重要な事は、ど

んな善を選び、どのようなものが人類に善と公認されているのかということなのであった」²³。蔡元培は西洋文化をいかに勉強するかについて明確且つ具体的な方法を提案した。それは「善を選んでそれに従う」ことである。こうした方法は蔡元培が東西文化を融合する基本的な態度である。

蔡元培は西洋文化を勉強するときに重要なことは、いかに西洋文化を吸収して中国文化を発展させるかということであると考えていた。彼は文化交流のなかで、外国文化に対してはそれを十分に「消化」しなければならないと指摘していた。つまりそれは理解することである。西洋文化をそのまま盲目的に受ける態度に強く反対している。彼はかつて「文明之消化」という文章で、外国文化を如何に消化、吸収するかについて明確的に論述をした。彼が言うには「およそ生物が無生物と異なっている証拠は非常に多いが、もっとも重要な消化作用である。消化というのは、外界の適当な食物を吸収し製錬して、自分のものに変化させ、自分の成長を助けることである。これは微生物から人類に至るまで共通的な作用である」。また、「人類の消化作用は、ただ物質の面だけでなく、精神の面にも存在している。個人も民族も同様である」²⁴ということであった。彼は消化作用が自身の成長に効くものであることを強調した。同様に、人類は外来文化を吸収するときも「消化」という点については深慮すべきだ。消化して理解した上で外国文化を自分にとって有利なものに転換させ、すなわち自分の新鮮な血液や養分として、本国の文明を発展させ、繁栄させる。いかなる民族の新文明もすべてこの過程を通過している。「ギリシア民族はエジプトやフェニキア諸古代国家の文明を吸収し消化したからこそギリシアの文明を作り上げたのである。ゴール、ゲルマン諸民族はギリシア、ローマおよびアラビアの文明を消化し、今日ヨーロッパ諸国の文明になる」²⁵。彼は吸収と消化との関係を以下のように言及した。「吸収とは消化の予備である。必ず消化できるものを選んで吸収する。肉を食べるものは骨を残す、果実を食べるものは核を残す、全部呑み込む者はいない」。そうでなければ「消化不良の病気になる」²⁶のである。

「文化之消化」は、蔡元培が1916年8月フランスで発表した異文化思想に関する著名な論文である。当時、国内では陳独秀をはじめとする先進的な知識人らは新文化運動を起こしている。蔡元培は学術の視点から外国文化を学ぶ上で持つべき態度を提唱した。これは先進知識人の主張および新文化運動に直接的な指導的意義を有するものである。蔡元培は、学術に対する追求は目的であって手段ではないという主張を終始堅持している。彼にとっては「ヨーロッパ文明は学術を中堅とするものである」²⁷と考えた。さらに、彼は「青年は民族の責任を

負うとしたら、まず学術の責任を負わなければならない。学術の責任をどうやって負うか。重要なのは丹念に学理を研究し、社会、国家、人類に対し最も有効な貢献をする」²⁸⁾ことであると強調した。また、蔡元培は、「研究とはただ欧化を輸入するだけではなく、欧化の過程で新たな発見をしなければならない、ただ国粹を保護するだけではなく、国粹の真相を明らかにしなければならない」²⁹⁾という東西文化の相補的あるいは互惠的な関係を明らかにした。ここで、彼はわれわれに文化振興、発展する過程を示した。即ち、一つの民族文化の進歩過程はほかの民族の優秀な文化と互いに吸収融合する過程である。「一つの民族はほかの民族の文化を吸収しないかぎり進歩することができない。」³⁰⁾ということである。そして、彼は、外国文化を勉強する過程においては消化を善くし、弁別に注意して養分を吸収しながら、その糟粕を捨てなければならないと指摘した。これらの論述は、蔡元培の文化思想の深さと広さを示している。彼の理想は中国伝統文化の真髄をまとめ、東西文化が融合する過程において、一種の新文化を出産し、中国文化を一つ新境界に到達させることであるといえる。ゆえに、彼は次ぎ二つのことを強調し力を注いだ。一つは中国伝統文化中の糟粕を批判しながら精華を継承することである。もう一つは文化交流の必要性を強調し、思想、文化科学などの分野で西洋に学び、そしてその「真髄」の獲得を目的とすることを提唱することである。

では、どのような方法で西洋文化を「吸収」するのであろうか。必ず「我」という立場から「吸収」する、「そうすれば外国の思想、言論、学術を吸収して消化し、すべて『我』の一部となり、外来文化に余すところなく同化されることはない。そうでなければ、ドイツに留学するなら中国に何人かのドイツ人が増え、フランスや英国に留学するなら中国に何人かのフランス人やイギリス人が増えるだけ」³¹⁾ということになる。ゆえに、西洋を学びとることは、決して全面的に西洋化することではなく、自分の文化特性を保ちながら、それを世界文化の一部として存在させることにほかならない。外来文化を追求、吸収する目的は中華民族の特色ある新文化を造りだすことである。

前述したように、蔡元培は、西洋文化の根本は学術にあり、そして西洋の発達も学術を中堅としたものであるということを指摘した。ゆえに、「吸収」するならまず学術を吸収しなければならない。彼にとって、西洋文化の根本を明らかにすることは西洋文化を学び、その方向や目標も明確にすることである。彼は、必ず「我」の立場から西洋文化の根本を理解し、そして西洋の学術思想を「吸収」「消化」と強調した。

これと関連して、もう一つの問題はどのように中国伝統文化に対応するかである。文化交

流の規則から見れば、人々は固有文化の基礎を保持した上で外来文化を受容することであろう。ゆえに、蔡元培は、「われわれは古いものも文明であると認めれば、そこから現代科学精神と衝突しないものを剔出することも決して不可能ではない」³³と指摘している。彼にとって、旧文化から「科学精神と衝突しない」ものを求め得て、進んで新旧文化の融合を達成することが目標であった。その際「融合の方法は、まず西洋科学精神を獲得し、さらにそれをもって中国の旧学説を整理して、はじめて新しい意義が発生する」³⁴というものであった。ここで、彼が指摘した西洋科学精神はすなわち学術思想である。つまり、西洋学術思想中の科学精神をもって中国伝統学説を整理し、そこから一種の新文化を造ることにほかならない。彼のこの観点は五四運動前後になって、さらに深化した。この観点は当時東西文化の論争から現れた新旧文化の関係に対し如何に対応するかという問題に答えて、伝統文化に対するあるべき態度をも明確に指摘したものであった。

したがって、蔡元培は、われわれに近代社会の中で各民族間の文化交流の必要性およびいかに正確に中国伝統文化と西洋文化を評価すべきか、その方法を教えてくれた。そして文化交流の中で「我」の立場から外来文化を「吸収」しながら科学的な方法で伝統文化を分析研究し、中国文化建設の見地から取捨と融合を行い、吸収したその成分を用いて文化建設の未来像を作り、一種の、西洋とは異なる中華民族に適合する新文化を造ろうと彼は考えた。これこそ蔡元培思想において東西文化思想を融合する原則の核心である。この思想は西洋文化を勉強するという点で新文化運動の指導者の観点と一致しているが、彼の科学方法で伝統文化を整理し、文化の継承性と連続性を注意するという主張は当時の学者の認識を超えていた。

蔡元培はまた、「自尊自大」と「卑下して自棄する」ことは中国人が長期以来の保守思想によって形成された二つの極端な、文化の発展にきわめて有害なものであると指摘した。早くも彼は清朝が倒れ、1912年に「われわれ中国人は昔から一つの大きな欠点がある。それは自大である。その反面は自棄である。自大というのは保守的な心境が強くて、我が国は外国が及ばない四千年の歴史があるため、外国の法制やは皆取るべからずと思う。然るに度重なる敗戦により、態度が一変して外国人を崇拜し、なんでも外国を基準にして、何かをやろうとしたら、すぐにどここの国もあるといい、何かをやる勇気がないなら、すぐにどの国もやっていないのにどうして我が国がやれるのかという、これらの言葉はほぼ責任者の口癖になっている。これは自大から自棄へと変化してきたものである」³⁴と述べた。アヘン戦争以後、中国文化は西洋文化から激しい衝撃を受け、一部の人は、中華文化は悠久の歴史と燦爛たる

成果があるから自大な心理を生じさせ、西洋文化を軽蔑する。また一部の人は西洋文化の衝撃を受けたあと、外国を崇拜し、こびるようになって、卑下し、自棄的な態度を表した。この二つの態度はいずれも文化発展の障害である。蔡元培はこのような保守的な「旧習」を「打破」すべきだと認識していた⁹⁹。中国人はただ謙虚に西洋文化を勉強し、奮って追いかけるなら、長期を要せず、必ず世界の先進国家の列に入り込むことができる。彼は国民に自大と自棄との観念を打ち破り、中国文化を振興発展させようと勧告を告げると同時に、文化を発展させるために国際主義の視点を持つべきであることを強調した。彼は、国際間の文化の相互交流、発展および共同繁栄を実現すべきである。

そこで、1921年6月14日、蔡元培はジョージ・ワシントン大学での「東西文化結合」という講演の中で中華文化が国境越え、世界に向かってゆくことを期待することを表明した。これは、蔡元培の東西文化融合思想における一つの基本原則である。

こうした蔡元培の西洋文化に学ぶ方法と精神は、同時代の人の認識水準を超えていたことをはっきりと表している。彼はただ中華文化を高揚する情熱があるだけではなく、東西文化の融合と中華新文化の創造にも信念を持っていた。これは、彼の「兼容并包」の精神と切り離しては論じられない。

今まで蔡元培の外国文化を学習する精神と態度を論述してきたが、これから蔡元培の文化思想の中国社会における歴史的な価値と現実的な意義を検討しなければならない。

アヘン戦争後、西洋学が次第に東洋に入ってくるという流れの中で、中国思想界はいかに西洋文明を対応し理解するかという問題や西洋文化をいかに勉強するかと言った問題をめぐって、大いに紛糾した。中国伝統文化と西洋文化とを厳しく対立させる者もいた。全面的に国粹を貫くか、もしくは全面的に西洋化にするかという論争は、それぞれの論者の全く異なった立場をあらわしていた。これはまた、政治的領域での衝突が思想文化分野に反映したのもでもあった。中国伝統文化と外来文化をいかに対応させるかという問題に対し、蔡元培の考え方と態度は終始明確であった。彼は西洋資本主義国家の政治と社会制度、文化教育そして科学技術などを考察し研究した上で、中国の近代化が遅れた現状を真正面から受け止め、先の時代の思想家たちよりも思想文化の建設に力を入れた。この方面の改革を進め、新文化を創造するために、彼は保守的な国粹派の意見に賛成せず、また民族を滅ぼす全面西洋化派の意見にも反対し、また西洋文化を用いて中華文化に代えること、あるいは中華文化を用いて西洋文化に対抗するというやりかたにも反対した。彼は、伝統文化の遺産を継承することと

広く外国に学ぶこととを結びつけ、それらを吸収し、消化することによって、一種の新時代と対応する文化を作り出し、それによって中国の学問の新たな発展を促進しなければならないと主張した。ここから、蔡元培が文化思想の面において「中西兼融」精神を堅持したことがはっきりうかがえる。

彼はかつて鋭く指摘した。「国粹保存を主張する者は西洋科学の破産をいう。西洋導入を主張する者は中国の旧文化には価値がないという。この二者はともに極端主義である」と³⁹。ゆえに、彼は一貫して偏向や絶対主義に反対し、根拠のない空論も批判した。このような「实事求是」的な精神と態度ゆえに、蔡元培の東西文化を融合させるという主張と実践が生まれたのである。彼の東西文化を融合させるという主張の目的は、中国文化の近代化を実現させることと中国文化の再建設にあることは明らかである。彼のこのような東西文化に対する態度は、いまだに人々を啓発し魅する力をもっている。

蔡元培が、近代中国における東西文化の調和と新旧文化の折衷にもっとも貢献した思想家であると認められているのは、彼が厳格な正統的伝統文化教育を受け、人にうらやまれる科挙の最高峰に達したにもかかわらず、社会の現状に不満を持ち、晩清の西洋に学べという潮流の中で、西洋文化の生命力を見出した人であるからである。ゆえに、彼は伝統文化の束縛から抜けて、外国の政治、文化、歴史、科学技術に関する西洋学と新知識に触れて、それを紹介するようになったのである。思想観念を転換することからはじめ、上海で革命に参加した後、最終的にヨーロッパへ留学に行き、その本質を身を持って体験しながら西洋文化を比較研究し、視野を広げようと決心したのである。彼は外国に学び、西洋文化科学を重視することを中国の振興、変革と中国社会の改良と結びつけたのである。

同時代の思想家と比べると、蔡元培は中国の振興と近代化の発展といった問題を文化の角度から考えることをより重視する。革命に身をささげた後、彼は愚昧から離脱する理想を終始民衆の智慧を開発し、人材を育成し、そして中国の状況に適応する新文化の創造することに託している。彼は西洋科学と民主的な考え方を中国伝統文化の精髓と融合させ、その新しい価値観と倫理観を持って、一代の人々を育成し、のちの何代にもあたるの人々にも影響を与えた。

蔡元培は自分の「兼容並包」という思想的原則をもって、自分に深く根ざした伝統儒教文化と西洋文化の中核を有機的に結合させ、独特の東西文化思想観を形成した。この思想観は

近代中国文化、教育と科学など各分野の発展史において、「破旧立新、継往開来」の役割を果たした。彼の「兼容並包」思想は、思想自由の提唱、新思潮の伝播、新文化運動の展開と発展、思想文化の繁栄のために重要な先導と保護の役割を果たした。思想文化史の角度から見れば、蔡元培のこの思想は、近代化、新生文化を作り上げようとする後代の人に彼が残した貴重な遺産である。このような境地は人々に注目され、共感を呼んだ。人々はこの精神的境地を普及させようと呼びかけてきた。五四運動以来の八十年間に中国社会には巨大な変化が生まれたが、しかし蔡元培のこの思想は依然として生命力をもっている。なぜならば、この思想は彼の中国近代化への思い入れを表わしているからだ。すでに八十年が過ぎ、中国社会もさまざまな曲折と変化を経たが、近代化は終始中華民族の根本的な課題でありつづけてきた。近代化を実現する中、経済がハイスピードで発展し、科学技術革命が進行している現在、「伝統と改革」の関係に直面して、いかに中華民族の伝統文化を取り扱うか、いかに西洋文化を学びそして自らのために用い、民族を復興させ繁栄させるかという問題は、現代中国の国家建設の重要な課題となっている。この意味で、中国の近代化の過程がまだ継続しており、「兼容并包」、つまり域外すべての優秀文化と経験の精神を包容するという蔡元培の思想には依然として大いなる意義がある。この精神は改革開放をさらに高い境地へと推進する重要な方法論であるとも言える。

注：

- (1) 羅家倫「偉大与崇高」、拙編『蔡元培先生紀年集』（中華書局、1984年）第82頁。
- (2) 胡愈之「我所見的蔡元培先生」、同上第102頁。
- (3) 梁啓超「戊戌政変記」、『飲氷室合集・專集』第一冊、第一卷、第22頁。
- (4) 蔡元培「五十年中国之哲学」、高平叔編『蔡元培全集』（中華書局、1984年）第四卷、第366頁。
- (5) この東文学社と1901年日本人中島裁之が開設した東文学社とは違うものである。
- (6) 「蔡元培口述伝略」（上）、前掲『蔡元培先生紀念集』第251頁。
- (7) 蔡元培光緒二十四年七月九日日記（原稿）。
- (8) 蔡元培「我在教育界的經驗」、前掲『蔡元培先生紀念集』第242頁。
- (9) (34) (35) 蔡元培「全国臨時教育會議開会詞」、前掲『蔡元培全集』第二卷、第264頁。
- (10) 前掲『蔡元培全集』第二卷、第169頁。

- (11)『民立報』1912年6月22日第一頁、廣告。
- (12)(14) 蔡元培自寫年譜、前揭『蔡元培全集』第七卷、第318頁。
- (13)「蔡元培口述傳略」(上)、前揭『蔡元培先生紀念集』第260頁。
- (15)(16) 蔡元培「在卜枝利中國學生會演說詞」、前揭『蔡元培全集』第四卷、第65頁。
- (17) 蔡元培「大學改制之事實及理由」、前揭『蔡元培全集』第三卷、第130頁。
- (18)(19)(24)(25)(26)(27) 蔡元培「文明之消化」、前揭『蔡元培全集』第二卷、第467頁。
- (20) 蔡元培「告北大學生暨全國學生書」、前揭『蔡元培全集』第三卷、第312、313頁。
- (21) 蔡元培「東西文化結合」、前揭『蔡元培全集』第四卷、第50頁。
- (22) 蔡元培「中國的文藝中興」、前揭『蔡元培全集』第四卷、第342頁。
- (23) 蔡元培「復何炳松函」、前揭『蔡元培全集』第六卷、第484頁。
- (28) 蔡元培「我們希望的浙江青年」、前揭『蔡元培全集』第六卷、第490頁。
- (29) 蔡元培「北京大學月刊發刊詞」、前揭『蔡元培全集』第三卷、第210頁。
- (30) 蔡元培「說儉學會」、前揭『蔡元培全集』第三卷、第62頁。
- (31) 蔡元培「在清華學校高等科演說詞」、前揭『蔡元培全集』第三卷、第28頁。
- (32)(33) 蔡元培「杜威六十歲生日晚餐會演說詞」、前揭『蔡元培全集』第三卷、第350頁。
- (36) 蔡元培「三民主義的中和性」、前揭『蔡元培全集』第五卷、第283頁。